



2019年1月19日、26日 野原昭子さんがラジオインタビューを受けました。

「聖マルティンの家」を始めたキッカケや、ボリビアでの日常生活などを一部ご紹介します

※この記事は、2019年1月19日と26日に、キリスト教放送局日本 FEBC の番組『コーヒーブレイク・インタビュー』にて放送された内容の中から、一部をご紹介します。

◆キリスト教放送局日本 FEBC◆

AM ラジオ放送 1566kHz (毎日よる 9:30~10:45、日本全国放送)

インターネット放送 [www.febcjp.com](http://www.febcjp.com) (PC、スマートフォン)

## 🎤 どうしてボリビアへ行かれたんですか？

シスターだった時、修道会から派遣されました。ものすごく貧しい地域で、障害者が道端で物乞いをしている姿をよく見かけ、日本と違って国は何もしてくれませんか、助けたいと思って障害者自立支援施設「聖マルティンの家」を始めたんです。

それは内観の本に出会って、私が幼い頃死んだ重度障害者だった妹の死に、どこかで負い目を潜在意識に持っていたことに気付かされたからです。だから、徹底的に障害を持った人たちと一緒に歩かなければと思いました。院長が良い方で、在俗修道会を紹介して下さい、そこでやりたいことを試してみなさいと。

お金も何もないので、まず仕事を探したんですが、給料は月に30ドルくらい。薄いパンを一日一枚食べて、紅茶のティーバッグは一週間使うといった生活です。それでも働かなければいけない。でも、空腹で力が出ない。けれども、彼らは生まれた時からずっとこの生活でしょ。だから「私は彼らを助けたい」なんてウソですよ。彼らと一緒に歩かないといけないんですよ。

## 🎤 まさにイエス様がして下さいましたことですね。

実は、やりたくはなかったです。事業所となると、イエス様のように一人ひとりを大切にすることができなくなるんじゃないかって。

ところが神様は意地悪なんですね(笑)。

ある人が、家をタダで提供してくれたり、地面を舗装して、水タンクもつけてくれてお礼も言わないうちにいなくなってしまった人がいたり…。でも、それでも続けるためのお金はないんです。それなのに、その時点でもう5人の障害者が集まってきていて、彼らを放っておくわけにはいかない。だから、一年間日本で働いてお金を貯めようと帰国したんです。そこで仕事を求めて訪ねた社長さんが、いきなり100万円の小切手を渡してくれました。「これで足りるでしょ」と。一年のつもりが一週間でボリビアに帰って来ました。「私は嫌だって言ったのに…わかりましたよ、やりますよ。その代わり会計係は神様ですからね、お金がなくなったら私は辞めますからね!」って言って、今まで20年続いています。本当に神様はいらっしゃいますね。

これは確実です。

ここは自立を支援する家ですから、一人ひとり出来ることをしてもらって、段階を経て訓練するんです。週末の食事の準備も、全部自分たちでやります。手が動かない人にも食事の担当を任せます。目と口は動きますから、他の人に指示が出来ますよね。目の見えない人は味見をする。お互いに助けあって、ワイワイやっています。

一番大切なことは神様とつながることですから、必ず毎日みんなで祈ります。15人の中で話せる人は5人くらいで、ある人は「あ〜あ〜」と、その人なりのやり方で順番に祈ります。彼らの祈りは本当に可愛いですよ。変形した手を一生懸命合わせて、上を仰いで…。この祈りがあるから、家が續いているんです。

私のような悪者がやっているけれどね(笑)

○2019年5月16日 野原昭子氏より

先週、ロベルト(38歳)が私を訪ねてきました。とても悲しい、つらい人生を過ごしている人です。

彼の両親は酒飲みで暴力をふるい、そのせいで父親は早死に、母親の暴力に耐えきれず、10歳で家出し路上生活。

その後シスターたちのおかげで左官や大工の仕事を身に付け、兵役を終えた後、彼と同じような境遇の女性と出会い、5人の子供ができましたが、2人とも読み書きができず安い賃金でしか雇ってもらえません。

ところが、昨年6月頃路上で飴やガムなどを売っていた奥さんが車にひき逃げされ、集中治療室で4か月の治療の甲斐も無く亡くなり、多額の借金に苦しんでいるのに付け込んで、悪い人が良いふりをして彼にお金を貸し、多額の利子を取り立てようとし、それができなければ刑務所に入れると脅され、私のところにやってきたのでした。



聖マルティンの家のようす



聖マルティンの家から見た夕景

5人の子供のうち長男は17歳で、やっと小学6年を夜間の学校に通い2番目の女の子は白血病で毎週80ドルもする注射を打たねばならない。3番目も脳に異常があり検査をしなければならぬが、お金がないので頭痛に耐え、何度も鼻血を出しながらも学校に行っています。この3人の学校のカバンの中も見ましたが、学校から持ってくるようにとされている物はほとんど入っていません。たった1冊のノートにすべての科目を記入しています。そんなにしてるのにクラスで成績が良くクラス代表の旗を持つそうです。

4番目は6歳、5番目は4歳。二人とも出生届もされずこのままでは学校にも行けません。

借家には窓枠だけ、入口も2メートルほどのドアをつけるスペースだけが開いていて、外からの風が容赦なく入ってきます。ここはもう冬に近づき畑など朝方は零下です。

両親が施設に生活した経験があるからでしょうか、少しの物しか持っていませんが、それでも毛布はきちんと畳まれ、床にはごみも無く、本当に清潔な小さな部屋でした。突然訪問したにもかかわらずです。

昼少し前で長男が昼の食事を作っているところでしたが、ただマカロニを湯がいたものだけが昼食です。他に何もありません。冷蔵庫がありましたので許可をもらって開けてみたらほとんど空っぽ。肉も野菜もなくて、1袋のみかんとアロエの飲み物と他に2つほどのものがあるだけ。子供たちは5人ともやせ細りただマカロニでおなかを満たすだけ。

こんな状態で ROBERTO さんはまだ38歳なのに白髪が増え、糖尿病になり、田舎にいるときにピンチュウカという虫に血を吸われたのでしょその病気も持っています。これは治療しても治りませんが心臓か、脳にその菌が入って死にます。ただ治療すれば少しは寿命が延びます。またこれらの心配で胃潰瘍にもなっていて…よくもマーこれだけの不幸を担がなければいけないのかと信じられない家族です。

とにかく私にできることは、畑の住込み職員として雇い、その給料で毎月借金を払い、正式に雇用することで保険にも入れ、それでロベルトさんと子供たちの診察治療をさせるようにしようと話しています。

このように、ここではまだこんな家族がいっぱいいることと思います。

ただこの5人の子供たちの、本当に天使のようなあどけなさが頭から離れず、できるだけ早くこの悪い状態から抜け出せるようにしたいものです。

お祈りください。